

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 1 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20530589

研究課題名（和文） 現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究

研究課題名（英文） Friendship, SelfConcept and social adjustment on contemporary adolescents

研究代表者

岡田 努 (OKADA TSUTOMU)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：10233339

研究成果の概要（和文）：

本研究では、現代青年において傷つけ合うことを怖れる傾向について、これとふれ合い恐怖傾向、自己愛傾向、ランチメイト症候群傾向などとの関連について検討を行った。大学生に対する質問紙調査を行い、友人関係において傷つけ合うことを避ける傾向に関する尺度を開発し、共分散構造モデルによって検証を行った。

研究成果の概要（英文）：

This study explore how the characteristics to be careful not to hurt or be hurt by their friends relate to commu-phobic tendency, narcissistic personality tendency, and lunch-mate syndrome in contemporary adolescents. Surveys were administered to college students. The scale of the characteristics to be careful not to hurt or be hurt by their friends was developed ,and the structural equation modeling analysis revealed the model of the study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：青年心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：(1) 現代青年 (2) 傷つきやすさ (3) 自己愛 (4) ふれ合い恐怖 (5) ランチメイト症候群 (6) 友人関係

1. 研究開始当初の背景

研究代表者のこれまでの研究において、現代青年に特有な友人関係の取り方が、対人恐怖の一形態である「ふれ合い恐怖」と関わり、また自己愛の病理的な側面とも関わりが見られることが見出されてきた。しかしながら、これらの結果は、従来の対人恐怖傾向と自己愛の関連に関する研究と必ずしも一貫したものではないこと、現代の青年の友人

関係の希薄化が不適応とどのように結びつくかについてはより詳細な検討が必要となっていた。

よって、青年の友人関係および自己の特徴が、ふれ合い恐怖および自己愛傾向に及ぼす影響過程を、以下に示すモデルによって実証的に検証する。すなわち「友人から心理的に傷つけられる恐れ」は、「友人との内面的関係を取ることを拒否」と「過剰に円滑な関係

を指向する」ことを促進する。これまでの研究成果から、内面的関係を拒否する度合いが高い者ほど、ふれ合い恐怖傾向が高く、過剰に円滑な関係を指向する者は自己愛傾向が高いと考えられる。またこうした傾向は青年期後期において顕著に見られるだろう。一方、内面的関係の拒否は、これまでの研究から、自己の発達を抑制すると考えられる。こうしたモデルについて必要な尺度を作成し実証的な検証を行う。

2. 研究の目的

青年の友人関係および自己の特徴が、ふれ合い恐怖および自己愛傾向に及ぼす影響過程を、以下に示すモデルによって実証的に検証する。すなわち「友人から心理的に傷つけられる恐れ」は、「友人との内面的関係を取ることを拒否」と「過剰に円滑な関係を指向する」ことを促進する。これまでの研究成果から、内面的関係を拒否する度合いが高い者ほど、ふれ合い恐怖傾向が高く、過剰に円滑な関係を指向する者は自己愛傾向が高いと考えられる。またこうした傾向は青年期後期において顕著に見られるだろう。一方、内面的関係の拒否は、これまでの研究から、自己の発達を抑制すると考えられる。こうしたモデルについて必要な尺度を作成し実証的な検証を行う。

3. 研究の方法

以下のように第1次予備調査から第2次本調査まで4次に渡る調査を行った。調査はすべて連結不可能な無記名調査である。

(1)第1次予備調査：友人関係において傷つけ合うことを避ける傾向について尺度を作成するため、まず第1次予備調査として、自由記述による項目収集を行った。

回答者

4年制大学学部1～4年生 有効回答122名
実施時期 2008年6月～8月

友人との間で、お互い心理的に傷つけ合わないようになるため、どのような点に気を使っているかについて、短い文章での記述を求めた。

回答に際しては、無記名調査であること、研究の趣旨および回答への任意性について説明した上で、調査に協力できる場合にのみ回答を願った。

(2)第2次予備調査：第1次予備調査の結果を参考に項目を選択し、36項目からなる「友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度」の項目を作成し第2次予備調査を実施した。

調査対象者

北陸地方の高校生 有効回答者数234名（男子67名、女子167名 15～18歳 平均16.21歳）

北陸、東海および首都圏の4年制大学学生
有効回答者数227名（男子103名、女子124

名 18～25歳 平均20.07歳）の合計461名。
実施時期 2008年8月～2009年8月。
調査は授業時間内および大学見学の折に実施した。

回答に際しては、無記名調査であること、研究の趣旨および回答への任意性について説明した上で、調査に協力できる場合にのみ回答を願った。

尺度項目

① 友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度（以下「傷つけ合い回避尺度」と略称）。これは第1次予備調査において得られた自由記述回答を元に作成されたものである。

教示文は次の通りであった。「もっとも親しい同性のお友だちを思い浮かべてください。あなたはふだん、その方とどのような付き合い方をしていたり、またその際にどのような感じ方をしていますか？」

② 併存的妥当性の確認のため、柴橋（2004）のアサーションの心理的要因尺度より「配慮・熟慮」下位尺度6項目（「自分の考えを言うときは友だちを傷つけないように注意する」「友だちを困らせるようなことは言いたくない」「友だちの頼みを断るととても申し訳ない気持ちにする」「友だちにいやな思いをさせてまで自分の考えを通したくない」「友だちの気持ちや考えをよく聞いてから自分の考えを言う」「まわりの状況をよく考えてから自分の考えや気持ちを言う」）を同時に実施した。

また、岡田（2011）と同様に自尊感情へ至るモデルを構成することで、構成概念的妥当性を検証するため、以下の尺度項目を実施した。

③ 被受容感・被拒絶感尺度 岡田（2011）と同様に、杉山・坂本（2006）が作成した尺度項目から、被受容感6項目（「私は理解されている」「たいてい人は私に快く応えてくれる」「私はたいていの場で認められている」「私はたいてい受け容れられている」「私は人並みには大切にされている」「私は信頼されている」）、被拒絶感4項目（「私は悪く思われがちだ」「とかく無視されることが多い」「だいたい人は私につらくあたるだろう」「私は、よく批判される」）を用いた。

④ 自尊感情尺度 Rosenberg（1965）、山本・松井・山成（1982）訳のうち「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う」を除いた8項目を用いた。

②～④の教示文は次の通りであった。「あなた自身についてお尋ねします。以下の項目に示されるような内容は、現在のあなたにどの程度あてはまりますか？」

各項目とも「全くあてはまらない」（1点）～「とてもあてはまる」（5点）の5件法で

あった。

(3)第1次本調査：さらにこの尺度に基づいて第1次本調査を以下のように実施した。調査対象 首都圏、近畿圏、北陸の4年制大学生1～4年生 有効回答数464名(男子212名、女子252名 18～25歳)

調査項目

①友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度。第2次予備調査で作成された尺度。

②ふれ合い恐怖尺度 岡田(2002)において作成された尺度で、「対人退却」「関係調整不全」の下位尺度からなる。

③自己愛についての尺度：中山・中谷(2006)の評価過敏性-誇大性自己愛尺度および、上地・宮下(2009) 自己愛的脆弱性尺度短縮版を用いた。過敏性-誇大性自己愛尺度は、誇大性「評価過敏性」の2つの下位尺度からなる。また自己愛的脆弱性尺度短縮版は自己顕示抑制、自己緩和不全潜在的特権意識、承認・賞賛過敏性の4つの下位尺度からなる。

④ランチメイト症候群尺度 佐藤・畑山(2002)の作成した尺度に加えて、「友だちがいない人間だと思われるのはつらい」などの項目を今回新たに作成し加えたもの。

⑤自己意識尺度 菅原(1984)による尺度で「公的自己意識」、「私的自己意識」の2下位尺度からなる。

⑥自尊感情尺度 Rosenberg(1965)が作成し、山本・松井・山成(1982)が邦訳した尺度。回答に際しては、無記名調査であること、研究の趣旨および回答への任意性について説明した上で、調査に協力できる場合にのみ回答を願った。

(3)第2次本調査：当初の計画では、第1次本調査の大学生に対する調査結果に基づいて、高校生に対しても同様の質問紙を用いて第2次調査を行う予定であったが、第1次本調査において、ふれ合い恐怖の心性の構造についても、再検討が必要であることが明らかとなった。すなわち、同心性を構成する下位概念の内「対人退却」は行動的な側面を中心とした項目、「関係調整不全」は「不安感」を中心とした項目から構成されており、両者を区別してふれ合い恐怖を論じることは必ずしも適切ではない、またこれによって「対人退却」が誇大性自己愛、「関係調整不全」が過敏性自己愛と対応するという近年の対人恐怖モデルについても再検討が必要となることが明らかとなった。よってそのための準備的な調査を大学生対象に実施した。調査対象：北陸および北海道地区の4年制大学学生

調査時期：2012年1月

調査項目

①ふれ合い恐怖尺度：岡田(2002)で作成した尺度

②自己愛的脆弱性尺度：伊藤・村瀬・金井(2011)

回答に際しては、無記名調査であること、研究の趣旨および回答への任意性について説明した上で、調査に協力できる場合にのみ回答を願った。

なおこの課題は次期研究課題(課題番号24530811)へと継承され引き続き研究が続行される。

4. 研究成果

(1)第1次予備調査はデータマイニングソフトウェアを用いて、得られた回答を文章ごとに区切り、自由記述によるテキストデータを用語辞書によって要素(単語、品詞、出現頻度)を抽出し、文章や語句の関係性の分析を行った。主題分析の結果、相手の話を遮らないように聞くこと、相手の意見や価値観を否定しないようにすること、内面的な話題に気を使い、相手の気持ちを察するよう、立ち入りすぎないようにするといった内容からなるまとまりが見出され、雑多な対人態度の中から、他者と距離を置きながら同調する傾向が際だって認識されている可能性が示唆された。

本結果は日本パーソナリティ心理学会第17回大会において発表された。

(2)第2次予備調査において作成された尺度項目についてはまず探索的因子分析を行った。その結果、新たに作成された36項目の尺度項目から「友だちからバカにされないように気をつける」など相手から傷つけられたり恥をかいたりすることを避けようとする内容を表わす因子(「傷つけられ回避」と命名)9項目、「自分の内面的なことは話さないようにする」「友だちの内面に踏み込まないようにする」などお互いの内面に立ち入らず距離をとった関わりを表す因子(「距離確保」と命名)7項目、「自分が悪いと思ったらすぐにあやまる」「友だちの話をきちんと聞くようにする」など礼儀を守り共感的配慮によって相手を気遣う内容からなる因子(「礼儀」と命名)9項目、「友だちの気分を害するようなことを言わないようにする」「友だちを傷つけないようにする」など相手を感情的に傷つけたり気分を害したりする不安から防衛的に行動を抑制する因子(「傷つけ回避」と命名)8項目が得られた。 α 係数を求めたところ各因子ともに.6以上の内的一貫性が認められた。

また「配慮・熟慮」尺度得点との間で「傷つけられ回避」で $r=.411$ 、「距離確保」で $r=.198$ 、「礼儀」で $r=.664$ 、「傷つけ回避」で $r=.569$ (いずれも $p<.01$)であった。「傷つけられ回避」「礼儀」「傷つけ回避」のように、互いに傷つけ合わないよう配慮する対人行動を示す下位尺度との間で高い相関関係を持つことから、本下位尺度での併存的妥当

性も確認された。礼儀を守り共感的配慮によって相手を気遣う側面と、友人を感情的に傷つけ気分を害してしまう不安から防衛的に行動を抑制する側面が、それぞれ別の下位尺度（「礼儀」「傷つけ回避」）に分離されたことも、本尺度の有用性を示すものである。

さらに構成概念妥当性の確認のため、先行研究（岡田, 2011）と同様のモデルでの共分散構造分析を行った結果、十分な適合度（RMSEA=.083 CFI=.969）が得られ、岡田（2011）と同様に、「友人から傷つけられることを回避する」ことが、「友人から傷つけることを回避する心性」を経て、「被拒絶感」を抑制し、結果的に自尊感情を維持させる構造が示された。

また調査対象者をクラスタ分析により分類した結果、第1クラスタ（153名、うち男子65名、女子88名）は「傷つけられ回避」「距離確保」「傷つけ回避」の標準得点が正の値をとり、このうちでも「距離確保」が他のクラスタよりも高かった。このことから本群は、傷つけられることを恐れ友人との距離をとる群と考えられる。これは、岡田（2011）における「関係回避群」に相当すると考えられる。第2クラスタ（92名、男子31名、女子61名）は「距離確保」以外の平均値が正の標準得点で、特に「傷つけられ回避」「傷つけ回避」が4クラスタ中最大であった。すなわち、傷つけ合わないよう気を遣いながら関係を維持する群と考えられる。これは岡田（2011）の「気遣い・群れ関係群」群に相当すると考えられる。第3クラスタ（149名、男子49名、女子100名）は「礼儀」の平均値のみが正の標準得点であった。すなわち傷つけ合うことへの恐れを持たずに相手に対する礼儀を遵守しながら関係を維持する群であり、岡田（2011）の「内面関係群」に相当すると考えられる。第4クラスタ（57名、うち男子19名、女子38名）は「距離確保」の平均値のみが正の値であった。すなわち、傷つけ合うことを気にしないと同時に、礼儀を遵守して関係維持をはかることにも関心が低い、いわば孤高を保ち他者を遠ざける特徴を持つ群と考えられる。

以上のクラスタについて多母集団同時分析を行ったところ、第1クラスタは「被受容感」の平均構造が、他の群よりも相対的に低く、また自尊感情の切片は各群の間で中間的な値でありながら、平均構造の値は3群中最低値であった。すなわち友人からの高い被拒絶感と低い被受容感を得て、結果的に、自尊感情の維持に失敗している群であると考えられ。岡田（2011）における「関係回避群」と共通する特徴であると考えられた。また「傷つけられ回避」「傷つけ回避」の平均構造が3群中で最大値を示し

た第2クラスタにおいては、また自尊感情については、切片は3群中で最小値を示しながら、平均構造は第1クラスタよりも高かった。すなわち、友人から傷つけられないよう防衛的になりながら、友人を傷つけないように気遣うことで、友人から受容されたと感じ、もともと低かった自尊感情を高揚させる、といった一連の過程が顕著に見られる群と言え、岡田（2011）における「気遣い・群れ関係群」と同様の特徴と考えられ、このことから今回作成された「傷つけ合い回避尺度」の構成概念妥当性が示されたと考えられる。

本研究の結果は日本教育心理学会第51回総会において発表された。またこの結果に基づいて友人関係に関する新たな尺度構成を行った結果を金沢大学人間科学系研究紀要第4号に掲載された。

(3) 第1次本調査について、誇大的自己愛に関連する「潜在的特権意識」「誇大性」それぞれの下位尺度とふれ合い恐怖の「対人退却」下位尺度および友人関係の「距離確保」の間でモデルを構成し共分散構造モデルによって検証した。その結果、「潜在的特権意識」からは正のパスがみられ、一方「誇大性」からは弱い負のパスが見られた（項目得点を観測変数に投入、RMSEA=.062, CFI=.856 各因子へのパスが低かった誇大性の「自分の体を人に自慢したい」及び対人退却の「一人で趣味に没頭していたい」を計算から除外）。このことから、現実の自分がすばらしい存在であると認識するような顕在的な誇大的自己愛から直接的にふれ合い恐怖が生じるのではなく、本来自分が認められて然るべき（それが報いられていない）という意識から退却的な態度が生じ、友人との間で距離を置くような関係のあり方に繋がるという構造が示唆された。

この結果は、日本教育心理学会第53回総会において発表された。またこれらの概要に基づいて現代青年の自己愛のあり方との関連について日本心理学会第75回大会ワークショップにおいて話題提供を行った。

(4) 第2次本調査の結果についても、2012年度の学会において発表される予定である。

これらの成果に基づいて、次期研究課題において、「ふれ合い恐怖」の構造をより詳細に検討し、青年の心理的脆弱性と対人関係の関連について明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

① 岡田 努 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成— 傷つけ合うことを回避する傾向を中心として— 金沢大学人間科学系

〔学会発表〕(計4件)

①岡田努 いわゆる「ランチメイト症候群」と自己愛 日本心理学会第75回大会ワークショップ 自己愛研究の最前線(4):自己愛的パーソナリティと日常行動 2011.9.16 日本大学(東京都)

②岡田努 現代青年の友人関係とふれ合い恐怖的心性 再考 日本教育心理学会第53回総会 2011.7.24 北海道立県民活動センターかでの2・7(北海道)

③岡田努 現代青年の傷つけ合うことを回避する傾向についての研究 日本教育心理学会第51回総会 2009.9.20 静岡大学(静岡県)

④岡田努 現代青年の友人関係に関する試論:傷つけ合うことを避ける傾向について 日本パーソナリティ心理学会第17回大会 2008.11.16 お茶の水女子大学(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 努 (OKADA TSUTOMU)
金沢大学・人間科学系・教授
研究者番号:10233339